

日本教育工学会 FD ワークショップにおける 最終レポート添削ルーブリックの改訂

Improvement of Rubrics for Final Report in JSET Faculty Development Workshop

高橋 暁子^{*1} 根本 淳子^{*2} 鈴木 克明^{*3}
Akiko TAKAHASHI^{*1} Junko NEMOTO^{*2} Katsuaki SUZUKI^{*3}
徳島大学^{*1} 明治学院大学^{*2} 熊本大学^{*3}
Tokushima University^{*1} Meiji Gakuin University^{*2} Kumamoto University^{*3}

＜あらまし＞ 本発表では、日本教育工学会 FD ワークショップにおいて 2014 年度から導入した最終レポートの添削ルーブリック評価表の改訂について報告する。改訂版では、「学習目標・評価方法・授業内容の整合性」を削除し、「教育方法の妥当性」を追加するなどの変更を加えた。

＜キーワード＞ 高等教育 インストラクショナルデザイン FD レポート添削

1. 背景

日本教育工学会が開催している FD 研修会（ワークショップ）は、2011 年度（第 3 回）から「大学授業デザインの方法・1 コマの授業からシラバスまで」というテーマで実施している。研修会は、事前のオンライン学習、対面のワークショップ、事後の最終レポートで構成される。2014 年度には、最終レポートの添削者用にルーブリック評価表を作成した（松田ほか 2017）。ルーブリック導入の主なねらいはレポート評価の可視化であるが、特に「インストラクショナルデザイン (ID) 視点からの改善提案」という 4 つの観点は、合否判定というより、ID の視点からよりよい授業改善へのアドバイスに用いる目的で設定された。つまり、“学習促進機能”（安藤ほか 2017）が含まれている。しかし、実際のフィードバックコメントは添削者の力量に委ねられている現状があったため、ルーブリック評価表の改訂を行った。

2. ルーブリック評価表の改訂

根本ほか（2016）で、2012–2016 年度の最終レポートに対する改善コメントを抽出し、「目標」「評価」「方法」「その他」に分類した。この 4 つの大分類のなかにおいて、本研究では第一著者と第二著者が対面の KJ 法によって類似コメントをまとめ、サブカテゴリ名を付与した。その結果を踏まえ、ルーブリック評価表を改訂した（表 1）。

松田ほか（2017, pp.111）からの大きな変更点として、「3.学習目標・評価方法・授業内容の整合性」を削除し、「3.教育方法の妥当性」を追加

した。これは、根本ほか（2016）の大分類に合わせたためである。なお、削除した「学習目標・評価方法・授業内容の整合性」の内容は、観点 1～3 のパフォーマンス記述に融合させた。また、各パフォーマンス記述には、サブカテゴリの中から代表的なコメント例を付記し、それ以外のコメントへの参照リンクをつけた。なお、観点 3 の尺度 2 は、「オーバーフロー」に該当するサブカテゴリがなかった。観点 4 の尺度 2 は、部分的な不足の指摘であるため、尺度 1 の「具体的に書く」のコメントが活用できると考えている。

3. 今後の課題

今後、改訂版の有用性や妥当性を検証したい。また、各観点の尺度 4 は改善コメントがないため、良いレポート例を例示するなどの工夫も必要だろう。ルーブリック評価表に紐づけていないコメントの取り扱いも今後の課題である。

参考文献

- 安藤輝次, 山本冬彦, 石井康博, 田中俊也, 本村康哲, 松下佳代（2017）大学生に深い学びを促すルーブリックの活用. 関西大学文学論集 66(4) : 1-20
松田岳士, 根本淳子, 鈴木克明（編著）（2017）大学授業改善とインストラクショナルデザイン. ミネルヴァ書房, 京都
根本淳子, 高橋暁子, 岩崎千晶, 鈴木克明（2017）FD ワークショップ最終レポートの添削コメント分析. 日本教育工学会第 33 回全国大会（島根大学）発表論文集 : 483-484

表1 改訂後のルーブリック評価表（ID視点の改善提案）

観点	尺度	パフォーマンス記述	サブカテゴリ
1. 学習目標の妥当性	1	<u>科目の学習目標または対象者のいずれかが不明確で、科目の学習目標が科目名・概要（各回の内容）・対象者と合致しているか判断できない</u>	目標の具体化【20】 対象者分析【9】 前後科目（科目間の構造化）【5】
	2	<u>科目の学習目標が科目名・概要（各回の内容）・対象者に一部合わない部分がある</u>	科目内の構造化【6】 目標の修正・改善（中身を吟味する）【4】
	3	科目の学習目標が科目名・概要（各回の内容）・対象者と一致しているが、評価方法とは完全に対応していない	整合性【5】
	4	科目の学習目標が科目名・概要（各回の内容）・対象者と一致しており、評価方法とも対応している	
2. 評価方法の妥当性	1	評価方法が最終試験やレポートなど一回のみである（一発評価をしている）	期末試験廃止【3】
	2	複数の評価方法が検討されているが、評価の詳細が不明確で学習目標との関連がわからない（検討だけ）	割合【8】 単位取得の要件【3】 評価基準、尺度、方法の具体化【33】
	3	複数の評価方法を検討しているが、十分に検討されずに採用されているため、学習目標と対応していない（検討＜採用）	目標と評価の整合性【29】 活動と評価の対応【6】 評価の追加【3】
	4	複数の評価方法があり、それぞれの評価方法がすべての学習目標と対応している	
3. 教育方法の妥当性	1	<u>学習目標を達成させるための内容・学習活動が全くない、または一部ない（明らかに目標に合わない内容・活動になっている、学習内容・活動の記述が不明確でなにをやっているかわからない）</u>	個別の方法【51】 シラバス加筆修正【14】
	2	<u>学習目標を達成させるための内容・学習活動があるが、明らかに多すぎる（オーバーフロー）、または活動の順序に無理がある</u>	系列化【8】
	3	<u>学習目標を達成させるための内容・学習活動になっていると思われるが、説明が不十分</u>	目的・評価・方法の整合性【6】
	4	<u>学習目標を達成させるための内容・学習活動になっており、説明と裏付けを十分に提示している</u>	
4. 改善案の具体性	1	改善するとだけ書かれていて、具体的に授業のどこをどのように改善したいかが書かれていない	具体的に書く【6】
	2	授業のどの部分を、またはどのように改善するのかどちらかひとつ以上の記述がある	
	3	改善したい内容が具体的でかつ現実的であり実践に即している	ID理論【3】
	4	改善したい内容が具体的でかつ現実的であり実践に即しており、IDを中心とした裏づけを提示している	

注1：下線部は、（松田ほか 2017）表 7-1 の「ID 視点からの改善提案」との差異

注2：サブカテゴリの【】内の数字はフィードバックコメント数